

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：34310

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K14058

研究課題名（和文）多元的人間観に基づく関係論の構築 治療関係の対称性に関する臨床教育学的研究

研究課題名（英文）Construction of a relational theory based on a pluralistic view of the human being: A clinical pedagogical study on the symmetry of the therapeutic relationship.

研究代表者

小木曾 由佳 (Ogiso, Yuka)

同志社大学・研究開発推進機構・嘱託研究員

研究者番号：50829174

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、「多元性（plurality）」という語を用いて、差異を持った個体同士が関係しあうことが持ちうる創造的な意味について、臨床教育学の観点から検討することを目的としたものである。多元的な「個別性」の交わりは、各々が独自の「個別性」を持つ、「個別性」は、他者との関係性の中で変容しうる、そうした変容は、他者の変容にも影響を及ぼす相互的なものである、という3つのモーメントを含んでいると考えられる。本研究では、心理療法における治療関係を関係一般の雛形と捉え、2つのアプローチ、a) 心理学的類型論によって「多元性」を分析した思想の比較、b) 関係における対称性の検討、を通して考察を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、従来、経営や教育をはじめとする多くの実践的な分野で各論的に論じられてきた「ダイバーシティ」をめぐる議論を「多元性」という語によって思想的に引き取り、かつ、臨床心理士として心理療法の実践にも関わる立場から、理論と実践の絶えざる往還を通して臨床教育学的に検討した独創的な試みである。本研究で得られた成果は、後掲の研究成果一覧に示した通りであるが、その中でも、8冊の共著訳書に結実した成果は特に大きな意義を有しているように思われる。本研究におけるアプローチを通じて得られたこれらの成果によって、社会的対話や関係のあり方や多様性をめぐる今後の議論のための示唆を得ることができたのではないかと考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine, from a clinical pedagogical perspective, the creative meaning of relationships among individuals with differences, using the term “plurality. The pluralistic interaction of “individuality” is considered to include the following three moments: (1) each individual has his/her own “individuality,” (2) “individuality” can be transformed in the relationship with others, and (3) such transformation is reciprocal, affecting the transformation of others as well. In this study, the therapeutic relationship in psychotherapy was considered as a template for the relationship in general, and was examined through two approaches: a) a comparison of ideas that analyzed “pluralism” through psychological typology, and b) an examination of symmetry in the relationship.

研究分野：臨床教育学

キーワード：多元性 心理学的類型論 個別性 オルタナティブ教育 対称性 治療関係 教育関係 ピアサポート

1. 研究開始当初の背景

近年、LGBTQ や人権問題に関する議論をめぐって、「ダイバーシティ (diversity)」という概念が注目を集めている。一人ひとりが持つ違いを互いに認め合い、国籍や性別、年齢、思想等のそれぞれの特性が排除されることのない(インクルーシブ)豊かな共同体を構成していくこと。とりわけ教育や企業経営の領域において、社会的正義や共同体の成長効果を意図して掲げられるこのような発想は、理念としては極めて美しいものの、現実的には、多様な属性が集まるゆえに、相互理解の困難さ、対話の不可能性の問題が必然的に生じてきたり、結局は既存の価値観が維持されているままの土壌に少数派側が根付きづらく、大多数の論理の中に回収されることになったりと、当初の意図から外れた結果になる例が後を絶たないことが指摘されている(堀田彩(2015)「日本におけるダイバーシティ・マネジメント研究の今後に関する一考察」、『広島大学マネジメント研究』16, pp. 17-29, 2015年など)。そこに共通するのは、「差異」というものの静的な捉え方である。そのために、それぞれの価値観を越え出た対話が妨げられてしまい、結果として、多様な個がつながりを持たず、単に羅列されるだけに終わったり、また、“多数派”に属す側が自らの特性については疑うことなく、“新奇なものに理解を示す度量を持つとうとする”ことに終始したりして、共同体としての創造的な変化には繋がりがなくなるのである。一人ひとりの差異を真に認め合うとはどういうことか、多様な「個別性 (eachness)」を守りながら、相互の対話を通して、しなやかな一つのまとまりを形成することは可能であるのか。これらの問いを、多領域を横断して貫くような思想的探求が急務となっている。

2. 研究の目的

本研究では、以上の状況に鑑み、差異を持った個同士が関係しあうことが持ちうる創造的な意味について、理論的・質的に検討することを目的としている。ここで、それぞれに異なる個の複数性を表現すべく「ダイバーシティ」の代わりに用いるのが「多元性 (plurality)」の語である。アメリカの哲学者ウィリアム・ジェームズ (James, William) は、著書『多元的宇宙 (Pluralistic Universe)』において、各個形 (each-form) を奉ずる多元論・根本的経験論の立場から、「個別的なもの、個人的なもの、不健全なもの」の中に深い価値を見出し、どんなに極小の部分も、他との具体的な関係性において必ず結び合うがゆえに、「われわれの『多的世界 (multiverse)』は依然として『宇宙 (universe)』を形作っている」と述べている (James, W. (1909/1977): *A Pluralistic Universe*, Cambridge: Harvard University Press.)。本研究で用いる「多元性」は、このジェームズの議論を前提としたものであり、かけがえのない「個別性」を持った人間同士が、他者と関係し合いながら可能的に結びあっている (uni-) という意味での「多」(multi-) を含意している。その際、各々の「個別性」もまた、閉じられた固定的なものでは決してなく、絶えず他と影響を及ぼしあいながら変容しうる動的なものである。すなわち、ここには、次の3つのモーメントが含まれている。各々の個体が独自の「個別性」を持っている、この「個別性」は、他者との関係性の中で変容しうる、そうした変容は、他者の変容にも影響を及ぼす相互的なものである。

この3つのモーメントを明らかにすべく、本研究で注目したのは、心理療法における治療関係である。セラピストとクライアントの関係において個の変容を目指す基本的な治療関係は、自他関係の優れた雛形と考えられるからである。無論、臨床心理学の分野では、事例研究を通じた治療関係論の蓄積はあるものの、これが人間関係全般にまで敷衍して語られることは少ない。本研究は、従来、経営や教育をはじめとする多くの実践的な分野で各論的に論じられてきた「ダイバーシティ」をめぐると議論を「多元性」という語によって思想的に引き取り、かつ、臨床心理士として心理療法の実践にも関わる立場から、理論と実践の絶えざる往還を通して臨床教育学的に検討する独創的な試みであるといえる。

3. 研究の方法

本研究では、具体的には大きく分けて以下の2つのアプローチ、(1) 心理学的類型論という形で、人間存在の「多元性」を分析した思想家の理論の比較検討、(2) 治療関係における対称性をめぐる検討、を通して考察を行った。

(1) 心理学的類型論に関する検討

この検討は、2. に示したのモーメントに関わるものである。“他者の差異を認める”という行為は、他者の「個別性」と同時に、自分自身の「個別性」を認識することを原理的に伴う。この認識の手がかりとなりうるのが、古来より数々の思想家・心理学者が取り組んできた気質論・心理学的類型論である。それらの中には、単純なタイプ分けによって人間理解の物差しとして機能するだけでなく、人間同士の思想的多元性を気質的相違に遡及することによって理解しようと

する認識論を提示したものが含まれている。本研究で取り上げたのは、そうした認識論の射程を持った類型論であり、具体的には、ウィリアム・ジェームズが『プラグマティズム(Pragmatism)』(James, W. (1907/2008): *Pragmatism: A New Name for Some Old Ways of Thinking*, Rockville, Maryland: ARC Manor.)で示した二類型、深層心理学者ユング(Jung, Carl Gustav)が論じた心理学的類型論(Jung, C. G. (1921/1971): *Psychologische Typen*, Gesammelte Werke, Bd. 6, Olten: Walter-Verlag), およびその応用として1962年に米国で開発されたMBTI(Myers-Briggs Type Indicator), そしてスイスの思想家ルドルフ・シュタイナー(Steiner, Rudolf)が論じた四気質論を主に扱うことにする。上記の比較検討を通して、多元的な人間個体の「個性」を深く考察する方途を探求する。

(2) 治療関係における対称性をめぐる検討

この検討は、2.に示した と のモーメントに関わるものである。先述のとおり、本研究では、人間関係の雛形としての治療関係に着目するのであるが、一見したところ、そこにはセラピストの専門性が介在するがゆえ、心理学に関する専門的な知識を持つセラピストと持たざるクライアントとの間の絶対的な“非対称性”が存在する。治療という観点から見て、それは自明の前提ではあるが、本研究が目にするのは、先のユングが論じた「転移」の相互性に関する議論である。とりわけ後期のユングは、クライアントからセラピストへの転移とセラピストからクライアントへの逆転移を対称形で捉え、その双方の働きがクライアントの変容を引き起こすのであり、その際セラピスト自身の変容もまた不可欠の要素となるという特筆すべき議論を展開しているそれはユングにおいて、変容の働きが非常に深い意味を持つゆえに、セラピストとクライアントの非対称性が相対的に小さく見なされることによるが、こうして捉えられる治療関係を考察することは、人間関係一般における と のモーメントの解明に極めて有益であると考えられる。本研究で新たに注目したのは、欧米の一部の実践ではすでに重要性が指摘されている「レイセラピスト(laytherapist)」の援助行為である。“lay”とは、“素人の・非専門家”の意味であり、「レイセラピスト」は専門家による治療行為とは一線を画しながらも、一定の心理学的方向づけを帯びた心理支援を行う者を指す。心理支援について考えるとき、その行為は援助者と被援助者の非対称性の程度によって、スペクトラム上に描き出すことができる。最も限定的で、両者の相違が大きいのは、「専門家による治療」であり、専門的な訓練を積み、知識と技術を有した専門家から被援助者に対して一方向的に治療が提供される(ここではユングの転移論は一旦保留する)。それに対置されるのは、家族・友人間、地域や学校、職場等をはじめとする各コミュニティにおける「相互扶助・支え合い」であり、そのやりとりは自然発生的で、援助を提供する側と受け手とが常に反転しうるような対称性を特徴としている。本研究で扱ったのは、ちょうどその中間にある二種の援助行為である。この二つは、一定の心理学的なセッティングを前提とするが、援助の与え手と受け手との相違が専門家による治療よりも相対的に少なく、むしろそうした両者の同質性(相互性・対等性)にこそ治療的効果が見出されることになる。

本研究では、このレイセラピストをめぐる、次の3つの観点、すなわち(2)-1.レイセラピストの活動領域に関する歴史的・理論的考察、(2)-2.援助活動が援助者自身に及ぼす効果に関するインタビュー調査を通じた質的検討、(2)-3. 専門家とレイセラピストの協働およびレイセラピストの訓練に関するプログラムの整理・開発、を通して検討を行った。

以上、2つのアプローチを通して、多元的人間観に基づく関係論の構築を目指した。

4. 研究成果

本研究で得られた成果は、後掲の研究成果一覧に示した通りであるが、その中でも、8冊の共著訳書のうちに結実した成果は特に大きな意義を有しているように思われる。(1)類型論に着目した新しい切り口で思想研究を行い、多元的人間観の理論的本質が明らかになっただけでなく、(2)での質的検討をめぐっては、とりわけ勢力的に行ったオルタナティブスクールで働く教師たちへのインタビュー調査を通じて、知や経験において非対象的に先んじたものとして生徒の前に立つ教師像だけでなく、対等かつ非対称的であるような教師-生徒の教育関係が明らかにされ、そうした関係性を元に児童のみならず教師も変容していくようなありようが実践の場でも示された。本研究におけるアプローチを通じて得られたこれらの成果によって、多様性をめぐる今後の議論のあり方を探るための示唆を得ることができたのではないかと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 小木曾由佳	4. 巻 14
2. 論文標題 魚シボルの二重性に関する分析心理学的考察 わが国におけるなまぐさの思想と「夢心鯉魚」をめぐって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ユング心理学研究	6. 最初と最後の頁 151-171
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小木曾由佳	4. 巻 1
2. 論文標題 ウェルビーイングとユング心理学	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ウェルビーイング研究1 ウェルビーイングを考える 多面的アプローチの可能性	6. 最初と最後の頁 64-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計8件

1. 著者名 サトウ タツヤ, 長岡 千賀, 横光 健吾, 和田 有史, 小木曾 由佳 他	4. 発行年 2024年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 430
3. 書名 人物で読む心理学事典	

1. 著者名 井藤 元, 苫野 一徳, 小木曾 由佳	4. 発行年 2023年
2. 出版社 日本能率協会マネジメントセンター	5. 総ページ数 232
3. 書名 教育観を磨く 子どもが輝く学校をめぐる旅	

1. 著者名 ヴォルフガング・ギーゲリッヒ、河合 俊雄、河合 俊雄、猪股 剛、北口 雄一、小木曾 由佳	4. 発行年 2021年
2. 出版社 創元社	5. 総ページ数 224
3. 書名 ユングの神経症概念	

1. 著者名 マルグリット・ユネマン、井藤 元、小木曾由佳	4. 発行年 2022年
2. 出版社 イザラ書房	5. 総ページ数 104
3. 書名 黒板絵	

1. 著者名 C・G・ユング、E・ファルツェーダー、河合 俊雄、猪股 剛、小木曾 由佳、宮澤 淳滋、鹿野 友章	4. 発行年 2020年
2. 出版社 創元社	5. 総ページ数 360
3. 書名 近代心理学の歴史	

1. 著者名 ネル・ノディングズ、井藤元、小木曾由佳	4. 発行年 2020年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 312
3. 書名 人生の意味を問う教室	

1. 著者名 Elizabeth Brodersen, Pilar Amezaga	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 298
3. 書名 Jungian Perspectives on Indeterminate States: Betwixt and Between Borders	

1. 著者名 C・G・ユング、ソヌ・シャムダサーニ、ウィリアム・マクガイア、河合 俊雄、猪股 剛、小木曾 由佳、 宮澤 淳滋、鹿野 友章	4. 発行年 2019年
2. 出版社 創元社	5. 総ページ数 320
3. 書名 分析心理学セミナー1925	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------